

## 情報の海での水先案内人として

岩見 哲夫

膨大な量の情報がその質を問わず流れ込んでくる現代社会の中で、私達はその情報の海を泳ぎ切る能力を要求されている。泳ぎやすい海にするため、データベースの構造や検索システムの改良など、さまざまな工夫・努力が成されているが、その結果、皮肉なことに、情報の海はますます広く、深くなってしまう。例えば、データベースを利用するにしても、検索語の設定がうまくできなければ目的の情報を発見できない。

以前、あるテレビ番組を作っている人から映像の探し屋の話聞いたことがある。番組でどうしても使いたいシーンがあるが、かつどこかで目にしたという程度の

微かな記憶しかなく、その映像ソースを特定できる情報がない。いろいろ検索してみたがどうしても見つからないので、ペテランの探し屋に依頼した結果、ついに海外のフィルムライブラリーで見つけた。古く映像データの場合はデジタル化されているわけでもなく、検索語の設定にも主観が入るため、簡単にはヒットしなかつたのであろう。そこに探し屋のノウハウが生きている訳である。

話が横道にそれてしまつたが、私達も必要な情報を探そうとする場合、このようなあいまいな状況から始まるということは珍しくない。さらに、残念ながらこの探し屋のようなノウハウを持つことは難しい。私は、ここにも図書館の存在意義があると考えている。これだけ情報化が進んでいる中で、本という非デジタル資料を保管・管理する意味は大きい。ある棚の前に立つと、似た分野の資料が、検索することなく一覧できる。一冊の本の中にも、ある情報と関連のある情報が検索しなくても並ん

でいる。知りたい情報が、どのような言葉といつしよに使われているか、どのような別の情報と関係しているかといった、少し広い範囲を統合的かつ直感的に認識するという経験は、ネット上のデータベースを利用しているだけでは得られないと思う。このような経験があるからこそ、より適切な検索語を発見し使うことができる。

さらに、大事なことはそこにスタツプがいるということである。初心者には、ある情報を探そうとして見つからないと、その情報はなると判断することが多い。また、仮に見つけても、さらにより適確な情報があるかどうかについて注意が行き届かない。情報の探し方に留まらず、情報の信頼度・質にまでアドバイスをしてくれる図書館スタツプは、まさに情報の海での水先案内人である。

従来、図書館は主に本という形の紙媒体・非デジタル化資料の収集と管理が主な仕事で、教えるといった基本的には所蔵している資料に関することに限られていたように思う。しかし、今や図書館は情報センターとして進化を始め、館内には存在しない情報やその情報の扱い方についてもサービスを迫られるようになってきた。情報を提供するだけでなく、適確な情報を取得する能力を伸ばす役割も期待されている。図書館自身も

## 第五十四号 目次

情報の海での水先案内人として 岩見 哲夫

漫画大作戦 原口 秀昭

大江文庫紹介  
情報アーカイブ論における  
江戸期資料の活用 藤稿 嘉徳本の周辺  
『現場即応!!よくわかる  
小学校生徒指導』 緑川 哲夫

今と昔 ―数学と算学―

相談室ノート  
図書館から本の周辺  
『子どもたちのメンタリティ危機』 須永 和宏寄贈著書紹介  
Fashion Show  
シヨウの舞台裏 富田 弘美資料紹介  
『近世の遊行聖と木食観正』 西海 賢二

日々、進化し続けなくてはいけないのである。是非とも最強の情報ツールとして図書館を活用し、さらにユーザーの立場から、その進化をより良い方向に進めるよう手助けをしていただければ有り難いと思つている。

(学生部長)

# 漫画大作戦

原口 秀昭

拙著「マンガでわかる構造力学」が、出版から2年で6刷までいき、売上好調で、韓国語版もすぐに出版されました。デザインはやりたい、建築家になりたい、でも構造力学は苦手という建築学生は多くいます。何を隠そう、私もその一人でした。文系受験生の多い本学住居学科では、その傾向はさらに顕著となっています。

私自身は製図や建築法規を教えています、構造力学や環境工学といった難しい分野について、学生が多くやって来て質問してきます。そんな学生に、以前出版した、かなりやさしく書いたつもりになっていた構造に関する私の本を読んでもらいました。そしてまったく分からないという反応が・・・

そのショックから、構造力学の漫画本を書いてみようと思ってしまったわけです。自分でも多少は絵が描けるので、当初は漫画なんて簡単に書けるものと安易に考えていたんですが、やってみるとまったく、全然、前に進まない。文章だけ書くことが、いかに楽か思い知らされました。仕方なく、というか当時はやる気満々で、日本漫画塾というストーリー漫画の専門学校に毎週末通うことに。そこで3年間かなり絞られて、やっとネームが2本。1本は構造力学、1本は環境工学です。

ネームとは、絵コンテと台詞を合わせて書いた、ラフスケッチのようなものです。キャラクターの外見、性格、言葉使い、各章での場所、季節、天気、気持ち（天気に反映させる）などすべてを設定して、各コマでは右から左に台詞を流し、当然キャラクターの立ち位置もそれに合わせなければなりません。頁をめくるコマでは、次頁を期待させて早くめくりたくなるようなものがベスト。

さらに構造力学の基本項目を、どうやって日常のものに例えて、どうやってとことんやさしく分かりやすく解説するか、さらに漫画として飽きずに読んでもらうためにはどうするか。さんざん悩んでまるまる1年かけて約250頁のネームを上げました。プロの漫画家さんにも、だいぶ添削していただきました。

ネームは、編集側のさまざまな意図から、少女漫画家さんに絵にしてもらうことに決定。漫画家さんをなんとか説得して、絵にしてペン入れ、



トーン貼り、トーンけずり、台詞貼りを経て、ようやく出版できたのは、ネームが上がってからさらに2年かかりました。

学生向けに、建築の基本事項が簡単に分かるように、ブログ(<http://plaza.rakuten.co.jp/haraguti/>)も毎日更新しています。各項目では、必ず私自身が描いた漫画やイラストを付けるようにしています。絵が無い文章は、学生がまったく読んでもくれないからです。また建築の話は、絵があった方が明らかに分かりやすくなります。ただ、絵を描く作業が大変という、書く側のしんどさ、面倒くささの問題だけです。

漫画付きブログで発信し始めてから、そのブログを本にしたいという出版からの要望も寄せられてきました。漫画付きブログは、すでに1冊が本になり、もう1冊は今、編集作業中で、春には本になります。最初のブログ本は、すでに韓国語訳版も出ています。今は木造住宅について書いていますが、それも今年中には本になる予定です。ネームのもう1本、マンガでわかる環境工学は、同じ漫画家さんがペン入れをしている真っ最中です。

いまや漫画は、オタクの領域を遥かにはみ出して、私のような者の執筆手段としても非常に有効なものとなっています。今では夕食後に住居学科の学生向けの「イラスト+分かりやすい文章」という作業をするのが日課となっております。

(家政学部准教授)

## ◆ 大江文庫紹介 ◆

# 情報アーカイブ論における 江戸期資料の活用

藤稿 嘉徳

『情報アーカイブ論』の授業を担当するにあたり、方針として実用に繋がる学習と実践による理解を掲げました。知識を知恵に換えるには体験が必要と考えたからです。学生が概論講義を聴いた後に演習として情報アーカイブ構築のプロセスを体験することで、活きた知恵になると考えました。

そもそもアーカイブとは「現用価値を失った後も将来に保存する歴史的価値がある記録資料」のことです。資料そのもの(原本)はデジタル化できませんが、資料の持つ情報をデジタル化することで検索しやすくなり、二次利用の幅も広がります。今回、その情報アーカイブを構築するプロセスを学習するために「大江文庫」を活用させていただくことになりました。

「大江文庫」は、江戸時代を中心とした日本の生活文化を知る貴重な資料であり、学生にも取り組みやすい身近なテーマが沢山あります。また、このような貴重な資料に触れる機会を持つことは、良い経験になったと思います。

アーカイブ構築のプロセス(デジタルアーカイブ推進協議会のロードマップを参照)は、大きく6つの層で構成されています。

①【現物層】アーカイブする現物を収集・保存・管理する主体者、アーカイブする対象を特定する。  
②【計画層】アーカイブする目的を設定、目的に沿ったシステムの概要、構造、運用の計画を立てる。  
③【記録層】取材や撮影をした情報(原稿)をデジタル化して編集する。デジタル化された情報(原稿)をデータと呼びます。

④【DB層】画像・テキストデータとメタデータ(情報の属性)を登録しデータベース化する。  
⑤【プレゼンテーション層(制作層)】データベースに蓄積されたデジタルデータを使用して主体者や研究者等が作品を企画し、いろいろなメディアを利用して提供する。  
⑥【利用層】プレゼンテーション層で提供された作品を活用して個人や企業が再度自分の目的に則した作品・製品を作る。

以上のプロセスにおいて、①【現物層】②【計画層】では、主体者(本学附属図書館、対象「大江文庫」、目的「研究者・企業等への「データの貸し出し業務の効率化」と決まりました。システムの設計や開発は本講義の主題ではないので知識としての理解に止め、演習は割愛しました。③【記録層】④【DB層】

では、学生に課題として『衣』『食』『住』『女子教訓及び女子用往来物』の分類の中からアーカイブしたい資料を選定し、取材と撮影による「データ作成と編集」を体験。⑤【プレゼンテーション層】では、そのアーカイブデータを利用した企画を立て、簡単な「作品」も作りました。

成果として、アーカイブに「江戸名所図会」、「女用訓蒙図彙」、「万

(人文学部 非常勤講師)



取材



登録



撮影



PC画面

宝料理秘密箱」、「豆腐百珍」、「陰陽師調法記」等36点の資料を選び、取材・撮影を実施。大日本印刷のシステムを利用させてもらい、データをパソコン室からインターネット経由でサーバにアクセスし学生自ら登録しました。また、『養生訓』『風俗習慣』『料理』『菓子づくり』『風景』『ファッショ』とテーマを設定し同じく36点の作品を作り携帯サイトで配信することができました。料理の再現、風景の変遷、お呪いの紹介、ファッショの比較、習慣の違い等、各自が企画しキヤッチコピーも考え楽しい作品が作れました。

江戸時代の資料は、活字に慣れ毛筆文字を目にする機会が少ない私たちにとって、内容を理解するには手強い相手でした。しかし、結果として、学生には「大江文庫」の持つ歴史的価値を再確認してくれたと確信しています。江戸時代の生活文化が現在の私たちの生活に連綿と生き続けているという実感を持たせてほしいと思います。そして、学内の貴重な資料を扱う中で「アーカイブ」の意義を発見できたのではないかと考えます。

最後に、貴重な「大江文庫」を活用する機会をいただいた本学附属図書館に感謝いたします。ありがとうございました。

本の周辺

# 『現場即応!! よくわかる 小學校生徒指導』

緑川 哲夫

現在、全国の学校においては、  
いじめ根絶への取り組み、犯罪  
被害の防止、「小一プロブレム」  
や「中一ギャップ」といった新た  
な課題への理解と対応等に学校  
長を先頭に取り組んでいます。  
また、学校教育は、家庭との緊密  
な連携と協力のもとに行われる  
ことにより、はじめて確かな成  
果が期待されます。

しかし、教育現場では、学校と  
保護者との関係に、これまでに

経験しなかった新たな課題が認  
められ、保護者への対応の在り  
方に苦慮している先生方が少な  
くないといった現実が認められ  
ます。

少子高齢化、情報化社会等の  
変化の激しい社会の中で生きる  
児童に、「豊かな心」、「確かな学  
力」、「健やかな体」のバランスの  
とれた育成を通じて、学校が家  
庭や地域社会、関係機関との連携・  
協力を図りながら、一人一人の

児童に「生きる力」の育成を図る  
ことが喫緊の課題となっていま  
す。

このような学校現場の課題を  
踏まえて、小學校で役立つ生徒  
指導の解説書の刊行を期待する  
声が学校現場から寄せられるよ  
うになりました。そこで、生徒指  
導の実践をQ&A方式で分かり  
やすく解説したものととして、本  
書は、中学校・高等学校現場向け  
の解説書（あなたの疑問にこた  
える生徒指導対応事例80）に続  
いて発行されたものです。

本書の内容は、第1章「生徒指  
導の意義と今日的課題」、第2章  
「生徒指導と学校運営」、第3章  
「学校運営編」（二十四事例）、第  
4章「指導援助編」（四十八事例）、  
第5章「各関係機関との連携編」  
（八事例）から構成されています。  
本書は現在、管理職から新任教諭  
さらには教育委員会や教育相談  
機関等の関係者だけではなく、  
これから教職を目指す学生まで  
幅広い層の読者にご購読いただ  
いております。

（短期大学 生活科学科教授）



緑川 哲夫・長谷 徹 編著  
学事出版 2006.7

## 今と昔

## 数学と算学

現在、私たちが学校で学んでい  
る算数・数学だが、大半が明治時代  
の文明開化のときに西欧からもた  
らされた学問と言える。では、それ  
以前はどうだったのだろうか。

江戸時代には、算学と呼ばれる日  
本独自で発達した数学があった。「塵  
劫記」という書物が江戸初期に出版  
され、算学が庶民に広まっていき、  
数学ブームが起きたと言われている。

図書館の大江文庫で所蔵してい  
る資料のうち、「安政用文章」という  
本に「算学塵劫記」の記載があるの  
でここで紹介する。

下段右側の図だが、当時作られた  
計算問題である。「盗人 布を分る  
を立聞ば七反つつにては十四反不  
足、五反つつにては拾六反あまると  
いふ 布数と人かずを問」とあり、  
それを解いている絵と回答がある。

そのほか江戸時代には、算数でお  
なじみのねずみ算やつるかめ算な  
どもうみだされ、左の図のようにそ  
ろばんを使って計算が行われていた。

学生・児童の理系科目離れが時折  
話題になる現代、OECD国際学習  
到達度調査でも、日本の順位がどん  
どん低下しており、嘆かれています。

しかし、江戸時代からあった数  
学の素地、絶やすことなく続いて  
ほしいものである。

計算問題



そろばん



## 「氷頭なますはいつ頃からあるのか」

「氷頭なますという郷土料理がいつ頃からあるのか知りたい。」という質問がありました。学生の調査では、調理方法は載っていても成立年についての記述が無いとのことでした。

まず、「氷頭なます」についての基礎情報を得るために、百科事典系DBのジャパンナレッジで検索してみました。「氷頭なますは、新潟県や富山県の郷土料理として有名である。サケの頭の先から目のあたりまでに含まれる軟骨を氷頭とよび、これを薄く刻み、せん切りのダイコン、ニンジンといっしょに調味酢であえたものである。」との記述があり、どのような料理なのかは分かりました。用例を見るために事典類を見ると、『日本国語大辞典』(小学館)には「ひず(氷頭)」の項に氷頭の説明に加え出典として『延喜式』『十卷本和名抄』『名語記』『本朝食鑑』が記載されていました。『世界大百科事典』(平凡社)には、サケの項に『延喜式』『本朝食鑑』に氷頭の名が見られるとの記述があると共に、『本朝食鑑』中に氷頭をなますの材料にすると書かれているともありました。

学生に事典の記述を示し、郷土料理、食文化、年中行事、水産食品の分野の図書も探すことと、OPACの検索に使うキーワードも過去の事を調べるのだから「歴史」や「由来」、「伝承」といった言葉と組み合わせ、探すことをアドバイスしました。

検索結果のリストを作って一緒に本を見ていきましたが、氷頭なますの調理方法は載っていても由来について書かれている物はほとんどなく、かろうじて『日本料理由来事典』(同

朋舎出版)に千年前の資料に記載されている旨の記述がある程度でした。

結局、歴史的な事について紹介している図書は見つからなかったので『日本国語大辞典』に出典として挙げられていた本を見てみることにしました。

『日本古典全集』に全て収録されていましたので、確認していくと、『本朝食鑑』には「当今の鱈に作る氷頭であって」とあるので発行年の1697年頃には今に伝わる「氷頭なます」と同じものがあった事は確認できました。他のものは氷頭という食材がその時代にあったことを示していて、なますにしていたかは明確には分からないが、調理法としては単純なので「氷頭なます」が作られていた可能性は高いという説明を学生にしました。この中では『延喜式』が平安時代中期の905年頃に編纂が始まったとされているので、「氷頭」が出てくる文献としては一番古いようです。

次に研究論文が何かないかとCiNii等のデータベースを使って調べてみましたが、出てきた論文のなかに使えるようなものは見つかりませんでした。

また、他の図書館の調査事例が無いかと国立国会図書館のレファレンス共同データベースも調べましたが、こちらも該当するものはありませんでした。

最後に食関係と鮭関連の機関をいくつか紹介し、このレファレンスを終わりました。

### 図書館から 基礎ゼミの中の図書館資料 検索ガイダンスについて

図書館は学生に対して、研究・教育支援の場として、図書の貸出や文献複写など様々なサービスを提供しています。その他に、図書館の重要な役割として図書館利用ガイダンスがあります。学生が卒業研究やレポートを書くにあたって多くの図書や雑誌記事を探します。自分の探したい資料を入手するには、図書館を活用しないといけません。そこで学生が効率良く資料を探せる事を目的として、図書館ガイダンスを行っています。

図書館では、これまでゼミ単位として、卒業論文の作成に取り掛かる学生を対象とした図書館利用ガイダンスを行ってきました。図書館の一室を使用し、5～6名のゼミ学生を相手に、図書館職員が、パワーポイントを駆使して、図書館資料の入手方法を説明します。ガイダンス終了時には、講義評価に記入してもらい、職員の説明の仕方や、説明した内容について、ガイダンスの改善を行ってきました。学生の要望として、よく挙げられるのは「ガイダンスを一年生の頃に聴きたかった」という意見が多く聞かれ、平成19年度から、一年生を対象として基礎ゼミの中の一コマを、図書館資料検索ガイダンスを行いました。今回の基礎ゼミで受講した学生は324名で、一年生の71%が受講しました。ガイダンスの内容は、レポートの作成方法、本と雑誌の違いと特性、図書館の蔵書検索の方法、パソコンを使用している、P.C室に向き50名以上の学生を前にしてのガイダンスになります。初めての試みですので、講師役の職員も緊張し、早口になる事や、レポートの作成方法など初めて説明する項目もあったので、説明が十分に伝わらなかった事がありました。初めの頃は、改善すべき点が多々あり、試行錯誤しながら、徐々に職員も、ガイダンスに慣れて行ったのではないかと思います。

学生が図書館を使いこなす事は、図書館員にとって嬉しい限りです。今後も図書館利用ガイダンスを行い、学生の研究・教育を支援していきたいと考えます。

本学に着任早々、図書館に表題の拙著を寄贈したことから、おそらくこのコーナーでの執筆を依頼されたものと受けとめているが、自分が書いたものを自分で紹介するという経験は初めてのことなので、なぜか面映ゆい。

縁あって昨年4月から、この大学に勤務することになったが、もともとは家庭裁判所調査官で、長年にわたって少年非行の問題や離婚等の家族問題の実務に携わってきた。本書は教師向け月刊教育誌に連載したもので、内容としては、重大事件を起こした子どもたちと、ごく「フツー」の子どもたちの心の変容ぶりを比較する形で、二章立てにした。とくに読者がすんなり読めるようダイアログ形式のQ&Aとし、それに解説を加えた。

前任校にいたとき、草稿の段階でゼミ生の何人かに読んでもらったところ「これは面白い」と言ってくれたので、それに気をよくして早速出版を決意した。幸いにして前著の『不登校児が問いかけるもの』に引き続き、母校である慶応義塾大学出版会にお世話になった。

ところで著書のタイトルのことだが、周知のように「心の危機」とか「アイデンティティ危機」あるいは「思春期危機」といった言葉はよく耳にする。そこで、私は「メンタリティ危機」という用語を使いたいと考えた。念のためにインターネットで検索してみたところ、意外にも、

その言葉は見当たらなかったもので、結果的に「メンタリティ危機」を本書のタイトルとすることで編集者の了解を得た。この用語はおそらく本邦初ではないかと思う。

いずれにせよ、最近の子どもたちのメンタリティ（心性）の変容ぶりは凄まじい。昨年12月に本学で実施したFD委員会主催の吉川武彦先生の講演の中でもふれられていたように、今や大学生達もその例外ではないように思う。

(人文学部教授)



須永 和宏 著  
慶應義塾大学出版会 2005.10

## 本学教員寄贈著書紹介

平成19年に寄贈を受けた本学教員の著書等を紹介します。ご寄贈いただきましてありがとうございました。今後も著作物出版の折にはご寄贈いただければ幸いです。

### 井上真弓 (人文学部)

「狭衣物語」を中心とした平安後期言語文化圏の研究 シップス 2007

### 岩見哲夫 (家政学部)

南極色彩魚拓図録 テラバブ 2006

Antarctic fishes Rosenberg Publishing 2006

### 上村協子 (家政学部)

経営体育成における家族経営協定の意義；平成18年度

農山漁村女性・生活活動支援協会 2006

生活主体形成のための金融教育ライフマネジメントプログラム

東京家政学院大学 2007

規制改革と家庭経済の再構築 建帛社 2007

若者の生活設計および金融教育のための家計調査方法の開発

大学生の経済生活実態と金融教育研究会 2007

### 江原絢子 (家政学部)

食を育む水 ドメス出版 2007

### 大久保晴雄 (人文学部)

いのちへの慈しみ 教育出版センター 1991

日本語表現要綱 わこう出版 1993

表現考察 星林書院 1993

鑑賞近代詩 わこう出版 1994

春の小径：歌集 短歌研究社 1996

### 大橋竜太 (家政学部)

英国の建築保存と都市再生 鹿島出版会 2007

### 佐藤節子 (人文学部)

冬の国—ムンクとノルウェー絵画展 国立西洋美術館 1993

### 須永和宏 (人文学部)

親子の葛藤が晴れるとき サンパウロ 2003

子どもたちのメンタリティ危機

慶應義塾大学出版会 2005

### 西海賢二 (人文学部)

石鎚山への渴仰 石鎚神社石鎚本教 2007

近世の遊行聖と木食観正 吉川弘文館 2007

江戸の漂泊聖たち 吉川弘文館 2007

地方史研究ほか 論文多数

### 早川浩・小林昭夫 (生活科学科・家政学部)

テキスト子どもの病気 日本小児医事出版社 2007

### 原口秀昭 (家政学部)

インテリアコーディネーター受験スーパー記憶術 彰国社 2007

マンガでわかる構造力学 彰国社 2006

2級建築士受験スーパー記憶術 彰国社 2006

ゼロからはじめる建築の「数学・物理」教室

彰国社 2006

# Fashion Show ショーの舞台裏

富田 弘美

町田市産業祭でファッションショーを開催するのは今年で2回目になる。本研究室では学生の作品を地域社会に発表するとともに大学の被服教育の可能性を多くの人々に広く理解してもらうことや産・学・公の交流をより深めることなどを目的として参加している。

今年のショーのテーマは、“cherish～私の大切なもの～”である。これは尊く大切なものを心の中に思うことを意味している。幸せな未来、豊かな生活、人との出会いと結びつきの尊さなどは誰もが大切にしていきたいことである。しかし暗いニュースが絶えない今日において、学生たちは「人にとって何が最も大切なものであったのか」というメッセージをドレスに反映させて発信した。

ショーの準備では、卒制の学生は作品の制作とショーの構成の2つの作業を行う。作品制作ではデザイン画からデザイン・素材検討、フォルム作りとパターンメイキングを経て試作を重ね、縫製に入る。一人が1着に3ヶ月以上をかけて3～4着を仕上げる。一方ショーの構成ではドレス30着、モデルは4年生8名、1年生～3年生のスタッフが約20名で、演出、照明、音響、舞台美術、小道具、フィッター、スライド画像、会場、ヘア・メイク、広報などの作業を担当する。

さらに4年生はスタッフ全員がお互いに心を通わせる機会としてお茶会や食事会を企画する。これはショーを成功させたいという思いを共通目的にするとともに全体をまとめていく上で非常に有効である。

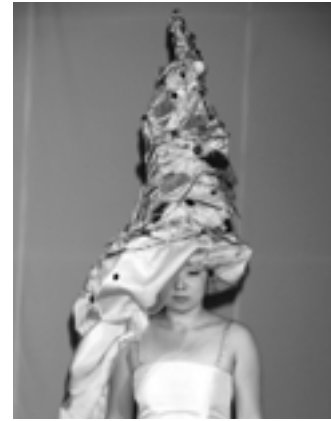
ショーの流れについては、その準備段階のエピソードも交えながら紹介する。第1部“Print”では、動物、花、宝石柄等をデザインし、実際に工場でプリントの制作を行った。ショーではモデルが少数のためにロングドレスで15秒間の早替えが生じた。2名のフィッターが必要最低限の着替え動作を分析し、舞台袖ではフィッターとモデルの秒単位の連携プ

り広げら  
カートを  
アスナー  
る、ホッ  
る、バル  
る、靴を  
る… そ  
ルは整然  
情を作っ  
と歩き出



レイが繰  
れる。ス  
はく、フ  
を上げ  
クを閉じ  
トを締め  
履かせ  
してモデ  
とした表  
て舞台へ  
す。この

状況を知  
スタッフ  
15秒間、  
で手に汗  
第2部  
の作品で



っている  
はこの  
祈る思い  
を握る。  
“Sweets”  
は、誰も

が口元をほころばせたいくなる甘いお菓子から連想する可愛くて優しい女の子をイメージした。主な作品は抹茶シロップをかけたかき氷に甘く煮た小豆と栗が添えられたスイーツをイメージした“宇治金時小町”(左下)、煮詰めた水飴を細い糸状に伸ばして何本も絡めた亀甲色の飴細工、“Candy Art”と称した円錐形のヘッドドレス(右上)がある。

演出としてはスイーツのイメージを視覚的に伝えるために画像を作成した。撮影はまだ残暑の厳しい9月で、さらにライトも使用するので、かき氷も飴細工もどンドン溶けて繊細な細い線の飴細工は壊れ崩れていく。再度冷凍庫で固めながら撮影したが、素人には難しい撮影であった。宇治金時の抹茶シロップは撮影用として抹茶に片栗粉でとろみと艶を付けてみた。調理実習のような現場の中で撮影終了後は美味しいスイーツが待っていた。

第3部“Art&Folk”では、ゴッホの「白い雲のあるオーブ園」、ポール・シニャックの「フェリックス・フェネオンの肖像」、ボッティチェリの「プリマベラ(春)」などの絵画からイメージしたドレスや印度、英国、韓国、日本の民族衣裳からイメージした作品が登場する。

第4部“Wedding”では、毎回お決まりのウエディングドレスの登場はつまらないという意見もあったが、演出効果として最後の盛り上がりを感じさせてくれるこのドレスはより必要な設定になった。特に今回は地域の子供たちも観てくれるので、女の子が憧れる純真無垢なこのドレスの位置づけは重要であった。

終わりに、ファッションショーは一人の力では成り立たない。多くのスタッフの理解と協力に支えられて成功するのである。華やかな舞台の裏側では、体調を崩したり、失敗をしたり、お互いに意見をぶつけ合ったり、助け合ったりといくつものトラブルと格闘している。そのためか、徹夜で仕上げたドレスを舞台上で披露した後は、いつも学生の目から大粒の涙がこぼれ落ちる。まさに感動を隠せないとても綺麗な涙である。

(家政学部助手)

## 資料の紹介

# 『近世の遊行聖と 木食観正』

西海 賢二著  
吉川弘文館 2007年9月刊

西海 賢二

江戸時代、民衆とともに生きる修行僧がいた。

米穀を断つ木食僧、仏像を刻む聖、加持祈禱をする修験者。彼らはなぜ諸国を漂泊し、苦行に身を投じたのか。民衆に支持された民間宗教者が数多くいたがほとんど研究の対象になることはなかった。あったとしても大正末年から民芸運動の一環として柳宗悦が紹介した木喰行道の研究がそのまま木食僧の研究という時代が八十年以上も続いてきた。本書は柳の木喰僧（木喰仏）研究のなかで木喰仏を刻んでいないことから抹殺された近世の遊行聖である木食観正上人をはじめ徳本上人、唯念上人ら二〇余名の民間宗教者たちはどのような活動をしていたのか。彼らと、村落内部に多数存在した「講集団」はいかなる関係にあったのか。念仏講、光明真言講などの講集団が民間宗教者の基盤であり、村落社会において重要な機能を果たしたことを究明したものであり、信仰的社会集団である講集団と遊行聖の実像を探り出したものである。

以下に主な内容を記す

I＝近世の遊行聖研究の課題と方法（課題と方法—研究史の回顧と展望を兼ねて民俗の世界をみる—「講集団の研究の歩み 一九八〇年代以降の民間宗教者研究 一九九〇年以降の聖・巡礼研究 聖・巡礼研究の新展開 仏教民俗学への再照射 六十六部研究の新展開」 近世民間宗教者の特質「近世民間宗教者と民衆思想 近世民間宗教者と在地修験 近世民間宗教者と身分的社会 近世民間宗教者と身分的周縁」II＝木食観正の研究（淡路島における木食観正「木食観正の出自をめぐって 喜作と百姓一揆 行者喜作の宗教活動 初期木食観正の活動 木食観正と木食（月夜大師）堂」以下細目略 木食観正と小田原藩 木食観正と相模 木食観正と武蔵 木食観正と江戸 木食観正と房総 甲斐・信濃における木食観正 民間宗教者と民衆



（文政二年（1819）二月に江戸で出された木食観正の瓦版部分）

本書は、近世宗教社会に表出している複雑かつ重層化した講集団の性格を、民間宗教者としての遊行聖の活動形態を通して把握しようとした著作である。この問題に迫るための成果は、歴史民俗学の立場から櫻井徳太郎『講集団成立過程の研究』（1962・吉川弘文館）によって、その機能から宗教的な講（氏神講・鎮守講・勧請神の信仰講など）、社会的講（社会組織的講・社会機能的講など）、経済的講と3分類されてきた。しかし、講集団は地域住民の生活領域全般にわたって深い関係をもっていたことに機縁して、わが国の村落集団内で果たしてきた役割は重要であった。櫻井の講集団の分類および機能は比較的宗教的な「講集団」の機能に集中していたのに対して、本書の視点は講集団の発生に修験者・御師・陰陽師・巡礼・虚無僧・誓女・木食僧など特定の民間宗教者、ここでは淡路洲本大工町出身の木食観正（行者喜作＝1754～1829）という「遊行聖」が百姓一揆に関わり殺人者となり、その後逃亡しながら六十六部としての廻国修行することによって、民間宗教者となって、相模国・武蔵国・駿河国・甲斐国・信濃国・安房国などに同行集団から講集団が簇生する経緯を各地域の政治・文化・宗教などとの関連性のなかで紹介するとともに、木食観正をめぐる信仰集団としての「講集団」が経済的集団に変化することや、地域の地場産業などにも関与していったことを論じたものである。あわせて、大正末年に柳宗悦によって日本の民芸運動と木喰上人、木喰仏として認知し、木喰上人すなわち木喰仏という通説が流布していることを是正した著作である。

（人文学部教授）